

「エルニーニョ現象」

毎日梅雨空が続いていますが、7月7日は「小暑」でした。暑さが日増しに厳しくなり、本格的な夏に向かう時期です。しかし今年はまだ気温がそれほど高くなっていません。長期予報では太平洋高気圧の勢力が弱いので、前線が上昇出来ず日本付近に停滞しそうで、長雨になりそうだと予測しています。その原因としては太平洋東方の海水温が高いからで、エルニーニョ現象と言われます。



ところでなぜ太平洋のはるか東の海水温が分かるのでしょうか？

実は海洋を航行する観測船やタンカー・貨物船・客船等が協力して人力による観測が継続して行われ、そのデータが蓄積されてきたことが。現在の気象予報に繋がってきたのです。そして現在は自動観測機器が設置され、海水温・塩分濃度・流向・流速などを測定しています。もちろん気象衛星の活躍もあります。海洋上の雲の分布や動きを観測し、海水面の水位データも取っています。太平洋の赤道には経度10～15度毎に定点観測のブイが設置され、人工衛星経由でデータが送られてきます。

(独立行政法人)海洋研究開発機構は全世界の海に3500のアルゴフロートと呼ばれる観測機器を展開し、海洋の表層から深度1000m・2000mに至る観測データを自動送信する「アルゴ計画」を推進中です。このように膨大なデータが得られるようになった結果、エルニーニョ現象やラニーニャ現象についても予測が出来るようになってきたのです。



こう言うと簡単そうに聞こえますが、経度1度は約111Kmに当たります。神戸から淡路島を超えて徳島鳴門ぐらいの距離でしょうか。経度10度はその10倍ですから北海道の札幌くらいまでの距離になります。

例え自動観測機器とはいえ、設置やメンテナンス・回収は人の手によるところです。データも24時間入ってきます。広大な太平洋を巡回し、膨大なデータを処理しているのは、実は人なのです。

私たちは今、タッチ一つで居ながらにして宇宙から深海まで、何でも見ることが出来るようになりました。しかしそれが出来るようになるまでには、見えないところで人の手が係わっています。データの一つ一つがどうやって計測され、どう経路して手元に届いているのか、それを考えながら情報は使っていきたいものです。そしてその情報をうまく活用して、今年の夏を健康に過ごしていきましょう。